

**R・K・カランジャ著 『現代アラブ世界』
と近代化の基本動向 (書評)**

解放

著者	岡崎 正孝
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	1
号	4
ページ	100-101
発行年	1960-11
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00052815

語るものである。たとえば Herbert Feith は、社会一般が憲法的傾向よりも、伝統的権威感情に訴えるものに影響されるようなところで行なわれている憲法政治について、その東南アジアの一例を提示している。

インドネシアにおいては憲法文書の修正が行なわれたことはない。修正が必要な場合にはもっと手っとり早く憲法そのものが改正される。1945年の独立宣言発布、49年のインドネシア合衆国の樹立、50年の単一共和国復帰、このような政治情勢の大きな変化のたびに憲法は新たに起草された。「こうした方法による憲法の公布というものは、憲法が神聖なものと考えられていない」(Feith, p. 194.) ということを示している。このことは民主主義的な価値に対するインドネシア・エリートの考え方の帰結であるというよりも、それを生みだす社会的なものひきおこす結果である。そしてそれがカリスマ的な指導者を生みだし、そのような体制が通例としてたどる悲劇的な社会的衝突をうみだしてゆく。内閣の弱体の基盤はこのように恒常的に存在している。そのうえに軍、大統領、地方指導者などの議會外的力によってさらに弱体化され、憲法政治は崩壊し、安定した基盤のうえの機能的な政府と政治というものは望まれないということになる。こうして経済・行政・治安上の問題が引き続いて起こってくる。しかしカリスマ的な指導者を生みだす基盤は、同時にまたインドネシア・ナショナリズムに基盤を提供している。そしてインドネシアの民族統一を維持し、またスカルノ大統領とその政府を維持してきたものであるとフェイスは述べている。

V

「西欧諸国の政府や政治の研究についての学問的な比較と、それに基づく若干の法則化が評価しうる水準まで達してきているということは、現在広く認識されてきている」(Kahin)。しかしこのような編者の「提供」する「資料」以上のものは、アジアと東南アジアの諸国についての研究に貴重な一石をおくものであり、『アジアにおける主要な政府』とともに今後の研究に刺激を与え、その進歩を促すであろう。さらに本書は読者を十分に納得させる広い視野からの取り上げ方と、最近の研究水準の上に書かれた規準的・体系的側面と、そして親切な読書案内などからして、東南アジアの政治について新しく興味をもたれているむきにも広く推奨することができる。

(早稲田大学社会科学研究所 増田 與)

R・K・カラランジャ著

『現代アラブ世界』

——解放と近代化の基本動向——

R. K. Karanjia. *Arab Dawn*. London, 1959. 甲斐静馬訳、昭和35年、理論社、228ページ。

I

原名は『アラブの夜明け』(*Arab Dawn*), 1959年刊。著者はインドの週刊誌『ブリッツ』の編集長でインドにおける著名な進歩的ジャーナリストの1人である。カラランジャは国際問題に造詣が深く、特に中東に関してくわしい。最近では中東に重大問題が起こるたびごとに同地を訪れ、独特のすどい観察を行なっている。ジャーナリストとして活躍するかたわら第1回訪中インド親善使節団長、ボンベイのインド・中国友好協会会長などをつとめるなど社会活動家としても著名である。

本書はこのベテラン記者の手になるアラブ民族運動史であるが、ただ歴史的研究のみならず著者が現地で直接入手したなまなましい情報や、現地で肌で感じとったものを基礎とした著作であるところに読者をひきつけるものがある。また本書には終始一貫ネルーやナセルを礼讃し、中立主義をほめたたえ、バンドン精神を強調するという態度がみなぎっている。

アラブ世界の動向についていままで主として西側からの情報にだけたよってきたわれわれは、アジア、アラブの立場からいま一度事態をみなおす必要があるが、この書はその機会を与えてくれよう。なお同じ著者の著作としてつぎのものがある。*China Stands Up, How Others See Us, SEATO: Security or Menace, The Dagger of Israel, Dawn or Darkness*.

この翻訳は *Arab Dawn* のイギリス版の全訳にイラク革命後のナセルとカセムの対立を取り扱った本書の続編ともいふべき *Dawn or Darkness* の序文を「むすびに代えて」として付け加えている。

II

本書は15章よりなっている。第1章ではサイコス・ピコーの密約(1916年)から始まり、英・エ協定、反英運動など第2次大戦前の動きを簡略に述べ、「豊富の中の貧困」, 「帝国主義に対する闘い」の中では、アラブ諸国の

経済的・政治的後進性の原因を追求し、ついでエジプト革命、バンドン会議、スエズ問題、アイゼンハワー・ドクトリン、イラク革命、アラブ連合共和国の成立、米・英のレバノン、ヨルダンへの軍事介入、イラク革命などアラブ民族主義の反帝国主義運動に論を進めている。

著者はバンドン精神を称揚するという立場からアラブ民族主義に対しては深い同情をもって記述する一方、「片手に砲艦を、片手で買収を」という西欧の政策に対してははげしいきどおりでこれを批判している。

まず著者が第1に強調していることはアラブの統一である。すなわち石油という貴重な資源と耕地面積の数倍に達する可耕地をもちながら貧困に悩んでいるその原因を、特権の少数者による犯罪的な搾取と外国資本による石油産業に求め、経済発展に必要なことはアラブ諸国間の経済協力であり、アラブ諸国が必要としているのはアイゼンハワー・ドクトリンでも、他のいかなる外来の計画でもなく、アラブ諸民族の社会・経済的発展のための本格的なアラブ・ドクトリンでなくてはならないとしている。またアラブ諸国が政治的に無力化しているのは、第1次大戦後西方の巧妙な政策によりアラブ諸国が弱小な国に分割されたためであるとし、アラブ諸民族が主権を主張し、帝国主義侵略に抵抗してノン・アラインメントと積極的な中立政策を奉じつつ民族的権威の増大と維持をはかるにはアラブ諸国の統一は不可欠であるとその統一を主張する。

そしてこのようなパン・アラビズムを指向する要因として、アラブ諸民族が共有する誇るべき過去、共通の言語・宗教、さらに経済的利害の共通性をあげ、これらをきずなとしてアラブ諸民族は再結合されつつあると述べている。しかしはたしてカランジャのいうような要因によってアラブの統一が達成しうるであろうか。アラブ諸国の足なみがつねにみだれているという事実を、ただ単純に西欧の陰謀ときめつけてしまうことが妥当であろうか。またアラブ人といってもその構成民族はさまざまであり、その持つ歴史もまちまちである。アラブ人同志の相克、ねたみあい、不信というものはいまになっても変わっていないという現実をどう考えたらよいのであろうか。異なった民族間の統一の要因、またその可能性を論ずる場合、社会的・経済的基盤の綿密な分析が不可欠であるが、この本ではそのような考究は全くなされていない。

アラブの統一のつぎに、オスマン・トルコ帝国治下における諸秘密結社、汎アラブ会議、アレクサンドリア・

プロトコール、アラブ連盟など統一のためのアラブ闘争小史を簡明に叙述したあとアラブ連合共和国の成立にふれ、ここにおいてパン・アラビズムは抽象的な概念ではなく、西アジア、北アフリカの全域に広範な影響力をもつ1個の現実になったとしている。

ついでシオニスト運動の育成、中東防衛機構、バグダッド条約、トルコ・イラク協定など西方の分割政策を問題として取り上げ、これらにはげしい毒舌をあびせる。つぎに西アジア全体を併呑しようという自信をもって企図された中東防衛条約機構を無残な失敗に導いたのははかならぬバンドンであったとバンドン精神を高く評価している。

またかれは議論をスエズ問題に向け、その政治的影響として、(1)バンドン精神の勝利、(2)ソ連に対する評価の向上、(3)アラブ民族相互間の統一感情の強化、(4)イギリスの面目喪失、(5)アルジェリアからイラクにいたるまでのアラブ世界を席卷した新しい確信の5つをあげている。そして米英の政策を陰謀ときめつける一方、ソ連の外交政策を「善意」あるものと評価しているが、これはいささか一方的な解釈ではなからうか。

最後にナセルとカセムの対立について、「カイロ、バグダッド、モスクワ間のすべてのトラブルの源泉は、アラブ・ナショナリズムのかの力強いシンボル、ガマル・アブデル・ナセルをゆさぶりアラブ独立と積極的な中立の立場から離れさせ、かれを西方との同盟の中に投入しようとするアラブ反動層の陰謀」と、また、「ナセルはすべてのアラブ国の政治的統一に優先権をおき、一方カセムはアラブ革命の社会的内容を強調した。この2つは相互に対立するものではないが、反革命分子はこれを2つの相反する傾向にゆがめることで成功した。そして社会的革命を主張する人々は共産主義者というレッテルをはられ、一方政治的統一を支持する人々は膨張主義者になった。そして正味の結果は反動的・封建的・帝国主義的要素の復活であった」と要約している。しかしナセルとカセムの対立をこのように単純に割り切ってしまうことはどうであろうか。もちろんカランジャの一貫して主張する外的要因、西欧の陰謀ももちろんその要素の1つとはなっていないが、本質的なものとは思われない。両国の社会的・経済的背景に求められるべきであろうと思う。

訳文は流麗で、また訳注も行きとどいており、そのつど指摘、補筆されている。

(調査研究部 岡崎正孝)